



龍角考：その二、鹿の角

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004313

龍角考—その二、鹿の角

大 形 徹

はじめに

前稿「龍角考—その一 キリンの角^{*1}」では、殷周の青銅器にみえる龍の角の形を考察し、その角の形は麒麟の角にもとづくのではないかと推測した。この麒麟形の角は龍以外の動物や人にもつけられている。そのことから、この角は龍の頭に生えているものではなく、龍をはじめとする動物や人の頭に着脱できる、冠のような存在ではないかと推定した。人の頭には本来、角はない。そのため、龍の原形である動物にも本来、角はないとみなすべきである。そこで龍の原形となる動物はワニではないかと推定した。中国のワニである揚子江ワニは口がそれほど長く突き出しておらず、鼻先が上を向いている。その形は殷周時代の青銅器の龍とよく似ている。

前稿では、龍の原形はワニであるという結論となった。ワニには本来、角はない。そのため、龍には本来、角がなかったという論理である。

しかしながら、現在、龍とされているものには、ほとんどすべてに角がある。その角の多くは鹿の角の形にみえる。実際、「角似鹿（角は鹿に似る）（宋、羅願撰、釋魚、龍）」と、文献の上でも角は鹿に似ているとされている。

本稿では、殷周時期よりあとの龍の角がどのように展開していくのかということを文献および図像からさぐり、同時になぜ鹿の角になったのかという理由について明かにしたい。

一、龍・みづちの角

角の無い龍

前稿でも考察した^{*2}が、角の無い龍がいる。

*1 大形徹「龍角考：その一、麒麟の角」人文学論集 33、13-44、2015

*2 前掲「龍角考」「八、角の無い龍」で簡単に考察したが、他の資料もまじえ、角度をかえて考察する。

「^{みづち}螭」がそうである。

後漢、許慎（58?-147?）撰、『説文解字』十三上螭には、

龍の若くにして黄、北方之れを地螭と謂う、虫に从いて离声、或いは云う、角無きを螭と曰う、丑知の切*3

とみえる。

ここで「或いは云う」と一説として「角の無いものが螭」だとされる。ただ、「龍の若くにして」とあるので、龍とは別種のものとする方がよいかもかもしれない。

「^{みづち}蛟螭」は、『説文解字』十三上で「龍の属なり*4」とされており、角の有無にはふれない。しかし、段玉裁は、「角無きを蛟と曰う*5」という文章を補っている*6。これは元、黄公紹原編、熊忠拳要、『古今韻会拳要』卷七、平声下三の「蛟」に「説文に龍の属、角無きを蛟と曰う*7」とあるのを受けて、『説文解字』の本文を補ったものである。そのことの当否はしばらくおくとして、『古今韻会拳要』がみた『説文解字』では、蛟は角が無いとされており、清の段玉裁もまたその方がよいと判断したことになる。

角の有る龍

一方、同じく「みづち」と呼ばれる「虬」については、

『説文解字』十三上虬に、

龍の子、角有る者*8

とされる。

ここでは龍の子とされるが、角が有るとされる。ただし、ここもまた段玉裁の『説文解字注』十三上虬は、まったく反対の説により、本文を改変している。そして、

*3 龍而黄、北方謂之地螭、从虫离聲、或云無角曰螭、丑知切

*4 龍之屬也。

*5 無角曰蛟。

*6 各本作龍之屬也四字。今依韻會正。

*7 説文龍屬、無角曰蛟。

*8 龍子有角者。

*9 龍無角者

龍の角無き者*9

と、龍の角が無いものとする。

これは、さきほどと同様に、『古今韻会挙要』にもとづくものであるが、ここでは、

説文 龍の子、角無き者*10

とされている。

ここでは「龍」ではなく、「龍子」とされている。そのことについて段玉裁は以下のように述べる。

各本「龍子有角」に作れるは、今、韻会の拠る所に依りて正す。然れども韻会尚お誤りて「子」の字を多くす。李善、甘泉賦に注するに説文を引き「虬、龍無角者」とす。他家の引く所「有角」に作るは、皆な誤まれり。王逸、離騷天問の虬に注して言う「有角曰龍、無角曰虬」と。高誘、淮南に注するも同じ。張揖上林賦注、後漢書馮衍傳注、玉篇、廣韻皆な曰く「無角曰虬」と。絶えて「龍子有角」の説無し。惟だ広雅のみ云う、「有角曰□。即虬字。無角曰□。即螭字。其の説乖異す」と。恐らくは転写の譌、典要と為さず*11。

つまり、改変したのは、『古今韻会挙要』にもとづくのだが、それ以外の多数の文献も根拠にしているという。そしてたんに「子」の有無にとどまらず、『説文解字』で、「角」があるとされた「虬」も、本来、角がないという。

その文献を時代順に並べ直し、年代などを補足して、以下にあげてみよう。

*10 説文龍子無角者

*11 各本作龍子有角者。今依韻會所據正。然韻會尚誤多字。李善注甘泉賦引説文虬、龍無角者。他家所引作有角、皆誤也。王逸注離騷天問虬言有角曰龍、無角曰虬。高誘注淮南同。張揖上林賦注、後漢書馮衍傳注、玉篇、廣韻皆曰。無角曰虬。絶無龍子有角之説。惟廣雅云。有角曰□。即虬字。無角曰□。即螭字。其説乖異。恐轉寫之譌。不爲典要。※□は『広雅』で欠字となっている。

表1 虬

原典	注釈者等	注釈	備考
屈原（前343-278）『離騷』天問、「有虬龍負熊以遊」	後漢王逸（126頃）	有角曰龍無角曰虬、言寧有無角之龍、負熊獸以遊戲者乎	※虬ではなく虬（異体字）
淮南王劉安（前179-122）撰『淮南子』卷六覽冥訓「服駕應龍驂青虬」	後漢高誘（?-?）『淮南鴻烈解』	駕應德之龍、在中為服在旁為驂、有角為龍、無角為虬、一說應龍有翼之龍也	
前漢司馬相如（前179年-117）上林賦（前掲『文選』所収）「乘鏤象六玉虬」	魏、張揖（?-?）注	虬、龍也。無角曰虬也。	
魏、張揖（?-?）撰『廣雅』「有鱗曰蛟龍、有翼曰應龍、有角曰□（臣彪）龍、無角曰□（恥支）龍」			段玉裁は「有角曰□」に対して「即虬字」。「無角曰□」に対して「即鱗字」とし、其の説乖異す、という。
前漢揚雄（前53-後18）の甘泉賦（梁、昭明太子蕭統（501-531）撰『文選』所収）「駟蒼螭兮六素虬」	唐、李善（630?-689）注	善曰…虬、説文曰、虬、龍無角者	
宋宣城太守范曄（398-445）撰『後漢書』卷五十八下馮衍伝「駟素虬而馳騁兮」	唐章懷太子李賢（654-684年）注	四馬曰駟、虬、龍之無角者也。	
梁顧野王（519-581）撰『玉篇』卷二十五、虫部第四百一、虬		奇樛切、無角龍	
原本『廣韻』（撰者不明）卷二、虬		渠幽切、無角龍也、又居幽切七	
宋陳彭年（961-1017）等撰重修『廣韻』卷二、虬		無角龍也、梁幽切、又居幽切七	

さきに見たように、本来の『説文解字』は「虬」について、「龍の子、角有る者」としている。ゆえに後漢の許慎（58?-147?）は「虬」には角があると理解していたのではないかと思われる。許慎は「みづち」の中で、角の有無を定めたかったのではないだろうか。

先秦・前漢には「虬」の角について言及した文献はない。後漢の王逸（126頃）や後漢の高誘（?-?）は、「虬（=虬）」について、「無角曰虬（角無きを虬と曰う）」とする。いずれも後漢であり、『説文解字』の作者、許慎とはその先後を定めがたい。

たしかに段玉裁が引く文献は「虬」に角が無いとする文献が多い。けれどもその大半は後漢の許慎の年代よりも、あとに作られたものである。

また段玉裁は「角有り」とする説に関しては、「他家の引く所「有角」に作るは、皆な誤まれり」「恐らくは転写の譌、典要と為さず」と断じているが、この言い方自体、あまりにも断定しすぎているように思われる。段玉裁は「龍」には角が有り、「みづち」には角が無いと考えたかったのではないだろうか。

二、尺木

後漢の王充（27-?）『論衡』龍虚に「尺木」のことが記される。

短書に言う、龍に尺木無ければ、以て天に升る無し、と。又た曰く、天に升るに又た尺木と言えるは、龍、木中従り天に升るを謂うなり。彼の短書の家、世俗の人なり。雷電発せし時、龍随いて起ち、雷電、樹木撃つの時に当たり、龍適たま雷電と俱に樹木の側に在り、雷電去るに、龍随いて上るを見る、故に樹木の中従り天に升る、と謂うなり*12。

じつは「尺木」に関してはきちんとした説明がなく、よくわからない。「尺」は一尺のことであるから一尺ほどの長さの木材と解釈できる。「尺土」つまり、ごく狭い土地に近いイメージならば、短い木ということになる。

王充は、「龍に尺木が無ければ、天に升ることがない」という短書の説が誤りだとして、これは、龍が樹木の中から天に升ることだとし、それはたまたま雷が落ちた時に樹木の傍らにいた龍が天に升るのを見たことによる、という。

王充は尺木を木材ではなく樹木だと解している。ただし「尺」についてはきちんとした説明がない。この論理展開は王充一流の合理化であるが、設定に無理がありすぎるように思われ、そのように解してよいのかは不明である。

*12 短書言、龍無尺木、無以升天。又曰、升天、又言、尺木、謂龍從木中升天也。彼短書之家、世俗之人也、見雷電發時、龍隨而起、當雷電樹木擊之時、龍適與雷電俱在樹木之側、雷電去、龍隨而上、故謂從樹木之中升天也

唐、段成式撰『酉陽雜俎』卷十七、広動植之二、鱗介篇には、

龍の頭上に一物有り博山の形の如し、尺木と名づく、龍に尺木無ければ、天に昇る能わず^{*13}。

とみえる。

ここでは、尺木は龍の頭の上に載るものだとされ、それは博山の形だという。また、尺木があることにより、龍は昇天できるのだという。

龍の頭上にあるということで、これは「角」と何らかの関連があるのではないかと思われる。前稿では林巳奈夫氏の茸形の角^{*14}を紹介し、それはキリン形の角と呼ぶべきではないかとした上で、「林氏のいうように、このキリン形の角に、龍巻あるいは太陽のイメージがあるとすれば、この角をつけたものは天界へと飛翔できる能力を付与されるというイメージがあったのではないかと思われる^{*15}」と考察した。

殷周の青銅器上の龍の頭上にはキリン形の角があった。これがあることによって龍は天界へと飛翔できた。そのイメージが、この尺木の話を形成したと考えてみたい。

尺木の話は後漢であり、それが博山に似るとされるのは唐代である。龍の頭上に博山が載るような図像は、さがしあてることができず、なぜ、「木」が「博山」にみえるのかということも不明である。

清、張次仲撰『周易玩辭困学記』巻一には、

雜俎に、龍首に一物有り、状、博山鑪の如し、尺木と名づく、龍に尺木無ければ、天に昇る能わず^{*16}。

とみえる。

さきにあげた『酉陽雜俎』で「博山形」とされていたものが「博山鑪」と書き直されているのである。これはたんに誤りとするよりも、博山を「博山鑪（博山炉）」に限定させたいという意識がそうさせたかみたい。

もし博山炉であれば、そこを通して異界へと通行するというを暗示させるものが

*13 龍頭上有一物如博山形，名尺木。龍無尺木，不能昇天。

*14 林巳奈夫『龍の話：図像から解く謎』中央公論社 1993 中公新書。

*15 前掲「龍角考：その一、キリンの角」24頁。

*16 雜俎、龍首有一物、狀如博山鑪，名尺木，龍無尺木，不能升天

ある。そのため、それが頭上に載ることで天界に行くことができるという発想^{*17}になるのではないだろうか。

宋、『太平広記』龍五、尺木は『酉陽雜俎』を引き、全くの同文である。宋、羅願撰『爾雅翼』卷二十八、釋魚、龍にも尺木が紹介され、これもほぼ同文である。清、陳大章撰『詩傳名物集覽』卷三では、「龍の頭上に骨有り、博山の形、尺木と名づく、尺木無ければ天に升る能わず^{*18}」と、「物」が「骨」に変えられている。「骨」だと「角」に近い。

唐、馬總撰『意林』卷三、桓譚新論には、

龍に尺木無ければ、以て昇天する無く、聖人に尺土無ければ以て天下に王たる無し^{*19}。

「尺木」に対して「尺土」を配置して、きれいに対句にまとめている。これは「龍」と「尺木」の説がある程度、人口に膾炙しているという前提のもとで、つくられたものであろう。

明、陳耀文撰『天中記』では、

雜俎云、龍頭上に一物有り、博山形の如し、尺木と名づく、龍に尺木無ければ、天に升る能わず、蓋し杜撰なり。雅翼之れを引くは誤りに似たり^{*20}。

と、『酉陽雜俎』の説を杜撰だと批判し、それを紹介する『爾雅翼』は誤っているという。この文章以前に王充の『論衡』の説をあげており、それを支持するために、『酉陽雜俎』等を批判しているのである。

王充は自分の頭で理解できないことを、文章の意味を組み替えて合理化し、納得しようとした。陳耀文も、それに荷担して、龍の頭上に「尺木」がなければ天にのぼれないというのは、杜撰な理論だという。

しかし、龍の頭の上に何かを載せることによって天界に昇りうるという発想は、はるか殷周の時代からある。それが「尺木」と呼ばれるものになっただけではないだろうか。

*17 拙稿「博山炉と香一蓬萊山との関わりを通して―」『東洋—比較文化論集』（青史出版、2004年）所収を参照。

*18 龍頭上有骨、博山形、名尺木、無尺木不能升天。

*19 龍無尺木無以昇天、聖人無尺土無以王天下。

*20 雜俎云、龍頭上有一物、如博山形、名尺木、龍無尺木、不能升天、蓋杜撰也。雅翼引之似誤

三、角は鹿に似る

龍の角に関しては、「一、龍・みづちの角」で考察したように、角の形状よりも、角の有無に関する詮索が多かった。古い文献では龍の角の形状に関しては触れられていない。

宋代になって、はじめて「角、鹿に似」とみえるのである。宋、郭思（1082に進士）撰『林泉高致集』附録には「画龍緝議」とあり、龍の九似が記される。

九似とは、頭、牛に似、嘴、驢に似、眼、蝦に似、角、鹿に似、耳、象に似、鱗、魚に似、髪、人に似、腹、蛇に似、足、鳳に似る、是れ九似と名づくるなり^{*21}。

「画龍緝議」とあるため、絵をえがく際に役立つようにということであろう。郭思の父は著名な画家の郭熙である。龍が現実にはいない動物だということを認識したうえで、似ているものを参照すればよいという意味であろう。ここに「角、鹿に似」と龍の角が鹿の角に似ているとされる。ただ、「耳、象に似」などは、はたして龍の耳の形象としてふさわしいのかと疑いたくなる。

宋、羅願（1136-1184）撰『爾雅翼』卷二十八、釋魚、龍にも九似が紹介される。

九似とは、角、鹿に似、頭、駝に似、眼、鬼に似、項、蛇に似、腹、蜃に似、鱗、魚に似、爪、鷹に似、掌、虎に似、耳、牛に似る。^{*22}

ここもまた「画龍緝議」と同様に「角、鹿に似る」と、龍の角が鹿の角に似ているとされる。ただし、同じなのは、ほかに「鱗、魚に似」だけである。この文章は有名で龍の形象を語る際、必ずといってよいほど引用されている。

この二つの例をみれば文献上、龍の角は鹿の角であるといつてよいことになる。また、たしかに鹿の角に似た龍の角の図像は数多くある。しかしながら、「四、図像にみる龍の角」で考察するように、図像上、必ずしもそうでないものも多い。

*21 九似者、頭似牛、嘴似驢、眼似蝦、角似鹿、耳似象、鱗似魚、髮似人、腹似蛇、足似鳳、是名九似也

*22 九似者、角似鹿、頭似駝、眼似鬼、項似蛇、腹似蜃、鱗似魚、爪似鷹、掌似虎、耳似牛。

四、図像にみる龍の角

前稿では殷周時代の「キリン形」の角について考察した。ここでは、その後、龍の角が、どのような形状をもってあらわされているのかということを紹介したい。

図版は以下のものを用いた。龍の図版は多すぎるため代表的なものをあげた。それぞれの時代を記し、その角の特徴について確認した。それらをもとに表を作成し、縦軸に角の特徴、横軸に時代を配して、そこに図版の龍をあてはめた。さらにエジプトの船の船首につけられる羚羊と、漢方薬の羚羊角を付け加えた。

図版

1 戦国 人物龍鳳図 出土于湖南長沙市陳家大山楚墓

『中国美術全集』巻軸画①

※龍には角、耳がない。上を向いている

2 戦国 人物御龍図 部分 出土于湖南長沙市子弹庫1号墓

『中国美術全集』巻軸画①

※龍の角は一角だけ見え、後ろに向いている。バランス上、もう一本あるはずだが、見えないのだろう。まるみを帯びた短い角のようにみえるが、雲気文の一部の可能性もある。龍の顔の前と頭の上にはいわゆる雲気文がつく。耳がない。上を向いている。

3 前漢 文帝行璽の龍鈕

『中国・南越王の至宝、前漢時代広州の王朝文化』毎日新聞社、1996年、南越王の金印

※龍は無角。

4 前漢 馬王堆3号漢墓T型帛画 中段 向かって右の下の二頭の龍の頭部拡大

『中国美術全集』巻軸画①

※上4-1下4-3の龍ともに角は2本。色は黒色。いずれも触覚のように細い角が2本、横にスジが何本もある。後ろ向きに生え、下の龍の角はS字型にカーブしている。耳は大きく毛が生えている。

5 前漢 馬王堆3号漢墓 太一将行図 中段の二頭の龍。

『中国美術全集』巻軸画①

※向かって右の龍5-1の二本の角は顔と同じ赤い色である。兎の耳のようにもみえる後ろ向きに生えた角がある。穴のないところから耳ではなく角と考えた。しかし角質のものではなく皮膚のようにみえ、軟らかい感じである。先端は尖っている。向かって左側の龍5-2は白い顔をしており、二本の角もまた同じ色をし、後ろ向きに生えているが、先端のみ丸く、こちらに向かって反り返っている。角と判断したが、このような形の角のも動物は思い浮かばない。

6 前漢 馬王堆1号漢墓T型帛画 上部向かって右の龍の頭部拡大

『中国美術全集』巻軸画①

※角は2本。色は黒く後ろ向きに生え、柔らかくカーブしている。耳はある。

7 前漢 馬王堆1号漢墓T型帛画 下部向かって右の下の龍の頭部拡大

『中国美術全集』巻軸画①

※角は2本。色は龍と同じ。根元は太く、横にスジが5本ほどある。後ろ向きに生え、柔らかくカーブしている。先端は尖る。耳はある。

8 前漢 馬王堆1号漢墓T型帛画 下部向かって左の下の龍の頭部拡大

『中国美術全集』巻軸画①

※角は2本。色は灰色。根元は太く、横にスジが何本もある。後ろ向きに生え、柔らかくカーブしている。先端は尖る。耳はある。

9 後漢 山東沂南漢墓博物館編『山東沂南漢墓画像石』齊魯書社出版 2001 62頁 52

中室八角柱南面的龍身

※角は一本太く後方に向いている。北面の龍の角は二本である。

10 後漢 山東沂南漢墓博物館編『山東沂南漢墓画像石』齊魯書社出版 2001 63頁 53

中室八角柱北面的龍身

※角は二本太く後方に向いている。

11 後漢 山東沂南漢墓博物館編『山東沂南漢墓画像石』齊魯書社出版 2001 101頁 車戯

※三頭立てで車をひく龍。角は二本、太い。いずれも根元の部分に枝分かれとはいえない大きな凹凸があり、後方に伸びている。

12 後漢 長廣敏雄著『南陽の画像石』美術出版社 1969.1 10上 龍

※羽の生えた龍。角は一本のように見えるが重なっているのかもしれない。太く長く後方にS字型にカーブしている。

13 東晋 顧愷之 洛神賦図 左側の六頭の龍13-1と半身を立てる一頭の龍13-2 『中国美術全集』巻軸画①

※左側の六頭の龍13-1の顔は交互に白と赤に塗り分けられている。角は蔵羚羊（チベットの羚羊）に似ている。スマートな角で後ろ向きに湾曲して生えており、先端は尖っている。半身を立てる龍13-2は角が大きく長く、三つ股に枝分かれしている。下方で枝分かれした二つの角は短い。一見すると鹿の角であるが、枝分かれした角の先が下を向いている。現実の角で、このようになっているものは思い浮かばない。

14 東晋 顧愷之 洛神賦図 右側の飛ぶ龍 頭部 『中国美術全集』巻軸画①

※龍の頭の短い角は後ろ向きに生えているが反りかえって前を向く。

15 唐（伝）呉道子 送子天王図 「送子」という題なので麒麟のようにも思われるが蛇のような胴と長く伸びる尾の形から龍と判断した。『中国美術全集』巻軸画①

※角はゴツゴツした感じで太く、後ろ向きに湾曲している。羊の角に似る。

16 元 無款 一〇二龍舟奪標図卷 『中国美術全集』6 絵画編 元代絵画 上海人民美術出版社。1989 148頁

※角は二本、後ろ向きにゆるやかに湾曲し、そのあとくると内側に巻かれ、先端部分は球になっている。

17 明 呉偉 仿李公麟洗兵図卷（部分之四） 一一六 『中国美術全集』7 絵画編 明代絵画（中）上海人民美術出版社。1989 147頁

※角は太く長く三股に分かれている。鹿の角に似る。先端は尖っている。

18 明 汪肇 起蛟図軸 一五八 『中国美術全集』7 絵画編 明代絵画（中）上海人民美術出版社。1989 195頁

※龍ではなく蛟。角はまっすぐに後方に伸びる。それほど長くはない。蛟とされるものは珍しい。

19 清 佚名 乾隆朝服像軸 一一六『中国美術全集』11 絵画編 清代絵画（中）上海人民美術出版社。1989

※乾隆帝の衣服に刺繡された龍。正面形。角は太く二股に分かれる。鹿の角に似るが、それほど長くはなく、角の先端は内側に曲がっている。

20 鈴木八司 黒田和彦編集解説『エジプトとオリエントの美術』講談社 1977.2 グランド世界美術 2 船飾りの水槽（部分）船に角のある獣首 ロータスとパピルスの柱、女性
はロータスをもつ

21 羚羊角 ANTELOPIS CORNU Saiga tatalica.L.など サイガカモシカなど ウシ科 角
北里大学東洋医学総合研究所 所蔵 2016.1.10 撮影（小曾戸洋氏より許可済み）

表2 龍の角の特徴

角の特徴	先秦	前漢	後漢	六朝	唐	宋	元	明	清
①ない	1	3							
②1本			9						
③2本	(2)	4-1, 4-2, 5-1, 5-2, 6,7,8	10, 11, 12	13-1, 13-2, 14	15		16	17, 18	19
④細い		6, 7, 8		13-1, 14,			16		
⑤太い		4-1, 4-2,	9, 11, 12		15				
⑥前向き									
⑦上方に直立				13-2					
⑧後向き		4-1, 4-2, 6,7,8	9, 11, 12	13-1, 14	15		16	17, 18	19
⑨先が尖る			12	13-1, 13-2, 14	15			17, 18,	
⑩先が丸い		4-2	9				16		19

①湾曲				11, 12,	13-1, 13-2, 14	15		16	17	19
②まっすぐ				9, 10					18	
③鹿の角に似る	a 枝分かれしない									
	b 二つに枝分か									19
	c 三つ以上に枝分か				13-2				17	

簡単な表をつくることによって、大まかな特徴は明らかになったと思われる。角のない龍は先秦、前漢にわずかに存するのみである。文献上では、みづちの角の有無について議論がさかんであったが、図像上は、ほとんどの龍に角がある。また「みづち」と明示された図像も、ここでとりあげたものでは明 汪肇「起蛟図軸」のみである。「龍」と「みづち」の図像的特徴は文献上、明確にされていないため、判別は困難である。

角が1本の龍も少ない。ほとんどが2本の角をもつ。この角が1本の龍は、山東沂南漢墓画像石の中室八角柱南面に造形される。北面に造形されるものは角が2本である。建築上のデザインのバランスなどが考慮されて、1本と2本になったのではないだろうか。

禽獣には雌雄で外貌が大きく異なるものが多い。それを反映してか、鳳凰は鳳がオス、凰がメス、麒麟は麒がオス、麟がメス、虹蜺は虹が龍のオス、蜺が龍のメスなどと言いつけられることが多い。しかし、図像上、描き分けられることはほとんどないように思われる。また龍に関しては、虹蜺の区別が実際の図像の龍に適用されることはほとんどない。またたんに「龍」と述べた場合、それがオスであるかメスであるかは、ほとんど問題にされていない。

たとえば陽である南に造形される角が1本の龍がオス、陰である北に造形される角が2本の龍がメスとされているのであれば面白い。けれども後世、そのような話はまったくみえないのである。

角はほとんどが二本である。現実の動物の世界では、角が一本のものは、犀などごく僅かである。角が二本のものは、細いものと太いものがある。宋代の文献、『林泉高致集』附録「画龍緝議」や『爾雅翼』などでは、いずれも龍の角は鹿の角であると記している。しかし、実際、図像上で、鹿の角によく似たものは、古いものでは、ほとんどない。唐代以前のものにかぎっても、東晋の顧愷之の龍の例、わずか1つしか見つけることができなかった。

それに比べて圧倒的に多いのが、後ろ向きに伸びている角である。これには、太いものと細いものがある。太いものは羊に似たものがある。細いものは蔵羚羊（チベットの羚羊orix）に似ている。細めの角が後ろに伸びているのである。これはエジプトの「船に角のある獣^{*23}（29）」の動物に似ている。舟の舳^{へき}につけられる動物はやはり羚羊であろう。羚羊の角は後ろ向きに伸びて湾曲している。これは戦国時代の「人物御龍図」とよく似ている。この図は、龍が湾曲してできる舟に被葬者（の魂）が乗り、天界に行く様子がえがかれている。龍自体が舟になっているのであるから当然、舳は龍の頭となる。この龍の角（2 戦国 人物御龍図）については判然としないが、前漢の馬王堆漢墓帛書にみえる龍の角は羚羊の角とよく似ているのである。

エジプトの舟は、棺を運ぶもので喪葬と関連する。舳の獣首はそれを先導するものとみてよいだろう。中国の龍の場合も同様の役割を果たしているといえる。

角の先が丸いのは前稿で考察したキリン形の角の影響が、ごくわずかながら残っているからではないだろうか。アフリカのキリンの角の先は尖っていないが、それが中国の殷周時代の龍の角に影響を与えているのではないかと考察した。戦国時期よりあとの龍の角からはキリン形の角が消えてしまう。キリン自体は漢代に図像が作られる。その角は一角で先端が丸く造形されている。龍の角にも先端が丸いものが時としてあらわれるのは興味ぶかい。

「二、尺木」で考察したような尺木、博山あるいは博山炉らしきものを載せている龍は見当たらなかった。前稿で、龍の角は生えているのではなく、キリンの角を王冠のように頭上に戴いたものではないかと考察した。そのことによって特殊な力を付与され、天に上るとされたのだらうと推測した。「尺木」を一尺の樹木と考えれば、鹿の角の形容とみなせないだろうか。鹿の角は木の枝に似ているのである。

前稿で、とりはずしできるキリン形の角だけでなく、鹿の角そのものも、どこかに据え付けるように「ほぞ」が作られていたことを述べた。また拙稿「鹿の角がもつ再生観念について：スキタイ、戦国楚墓、馬王堆漢墓をつなぐもの^{*24}」では、鹿の角が頭上に据えられる例を紹介した。「漆鎮墓獸^{*25}」には、四支の大鹿の角がついている。「鹿角立鶴^{*26}」は鳥の頭のところから5尖の角が生えている。鹿の角をつけることによって、

*23 『エジプトとオリエントの美術』講談社、1977、グランド世界美術 2。「船飾りの水櫃(部分) 船に角のある獣首 ロータスとパピルスの柱、女性はロータスをもつ」

*24 『人文学論集』31、2013、大阪府立大学人文学会。

*25 前掲「鹿の角がもつ再生観念について」88頁、図版7-7。元の図は、M2：240 正視図、復原高、117厘米。『荊州天星観二号楚墓』、湖北省荊州博物館、文物出版社、2003年、189頁。

生まれ変わり、天界まで飛昇できると考えたのではないか。ただ龍の頭に鹿の角をつけた例は六朝時代まで見いだせない。

前稿で、殷周の龍の本体はワニであろうと推定した。けれども實際上、角をつけていない龍はなかった。それは龍を作成すること自体が、ある種の呪術であるからであろう。龍の力によって、被葬者が昇天することを願うならば、「角」のない龍をえがくことはないのである。

「みづち」が水に潜む龍ならば、その時点ではまだ「角」がないのかもしれない。「角」を得て、あるいは「角」が生えて、はじめて天に飛昇できると考えたのであろう。「18 明 汪肇 起蛟図軸」に描かれた天にのぼる蛟に「角」があるのは、そのように理解してみたい。

おわりに

殷周時代の龍の角の多くは「キリン形の角」であった。しかしながら戦国時代以降の龍でまったく同様の角をもつものは絶えてなくなってしまい、わずかに角の先が丸く造形されているものにその痕跡をうかがえるものだけになってしまうのである。その理由は定かではない。キリンは中国で麟、あるいは麒麟として、孔子の獲麟の故事として、あまりにも有名な動物である。殷周時代には、その角のみが重視された。そしてかえって、これこそが確実に麒麟だという青銅器を提示することは難しい。ところが漢代以降、麒麟とみなしうる造形はかなり多くなる。その特徴は、頭上に描かれた一本の先の丸い直立した角^{*27}にあり、アフリカのキリンに似ている部分が多い。その後、キリンは時代とともに中国化していく。これは漢代に中国に入った師子（獅子）が、当初の写実的な造形から、しだいに唐獅子へと変容していくことと軌を一にしているのである。

戦国から漢初にかけて、龍という舟（戦国のものは一頭の龍、馬王堆三号漢墓では四頭の龍、一号漢墓では二頭の龍の組み合わせ）に乗って昇天するという宗教的な図が流行するようになる。この基本概念は儒教ではない。道教はまだ中国に生まれていない。わたしはかつて、その大きな枠組みが、エジプト的な太陽信仰にもとづく復活再生観念

*26 前掲「鹿の角がもつ再生観念について」88頁、図版7-4。戦国早期、高一四二厘米、一九七八年湖北随縣擂鼓墩出土、湖北省博物館蔵。前掲『中国美術全集40 工芸美術編 青銅器[下]』72頁、解説31頁。

*27 前掲「龍角考：その一、キリンの角」人文学論集 33、2015、43頁、図版5-1～4。

の影響を受けているのではないかと推測したことがある*28。その根拠はエジプトと中国の図像の類似である。

このような流れのなかで舟の形をした龍の角は、エジプトの死者の棺を運ぶ舟の軸につけられた図版20・21の羚羊の角に似てくるのである。羚羊は死者の魂を先導しているのである。そして「キリン形の角」は、かえって本来の麒麟の頭部につけられていくのである。その後、六朝時代になってようやく鹿の角に似た角をつける龍があらわれるようになる。文献的に龍が鹿の角をつけるとされるのは宋代になってからである。鹿の角を鳥や鎮墓獣などの禽獣の頭部につけること自体は戦国時代にある。そこには鹿の角のもつ再生観念、それにとまなう昇天の思想などが大きく影響している。

キリン形の角もまた昇天の象徴でもあった。「尺木」が無いと龍は天に上れないとする説の背後には、このようなキリン形の角、鹿の角のイメージが潜んでいるのではないだろうか。

空に上がるには「羽」という発想もある。戦国時代の鹿の角には鳥と組み合わせられているものもあった。龍に羽をつけた応龍は、漢代の画像石などに数多くえがかれている。しかし、後世、羽の生えた龍はほとんど描かれなくなる。「尺木」そのものについては、まだよくわからないことが多い。しかし、「尺木」があれば、天に上るとされた龍には羽はいらなかったであろう。頭の部分に何かをつけることで昇天することができるという発想自体は古くからあるのである。

そして、それは龍が本来、被葬者の魂を天に運ぶための乗り物であった、ということと強く結びついているのである。

※拙稿は二〇一五年度科学研究費基盤研究（C）「中国古代における龍と舟と扶桑にみる復活再生観念の研究」の研究成果の一部である。

*28 拙稿「中國の死生觀に外國の圖像が影響を與えた可能性について—馬王堆帛畫を例として」
東方宗教110、1-36、2007。



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



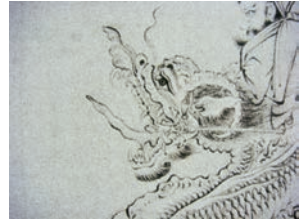
12



13



14



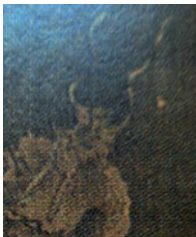
15



16



17



18



19



20



21